

中年期からとらえた親の老い
親イメージの変動と親の老いを実感した場面に焦点をあてて

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
谷村 ひとみ

本研究は、40～59歳（平均年齢男性 50.5歳 $SD=4.42$ 、女性 49.6歳 $SD=4.70$ ）の男女 193名（男性 74名、女性 119名）を対象に、SD法による親の“若い頃”と“現在”とのイメージの比較と親の老いを実感した場面を自由記述で尋ね、中年期の子がとらえる親の老いとはどのようなものであるかを明らかにする目的で行った。

父親・母親別の“若い頃”と“現在”のイメージの比較の結果、子の性別による大きな違いはなく、父親・母親という対象の違いで異なることが示唆された。特徴的な形容詞対は、“若い頃”より“現在”の評定が父親・母親共通して下がったものは「強い 弱い」「積極的 消極的」「元気な 疲れた」などで、これらは老いをとらえる共通した側面と考えられた。一方評定が上がったのは父親のみに認められ「優しい 厳しい」「柔軟な 頑固な」であった。母親の評定は全体的に下がり、特に母親のみに下がったのは「明るい 暗い」「ありがたい めいわくな」「思いやりのある わがままな」などであった。また“現在”の評定が父親では上がり、反対に母親では下がっていた形容詞対は「親しみやすい 親しみにくい」で、これらは父親らしさ・母親らしさからとらえる父親固有・母親固有の老いの側面と考えられた。

親の老いの実感場面を書いた自由記述から、父親・母親共通してとらえた老いの側面は加齢に伴う身体的・生理的・社会的な衰えであった。父親固有の老いの側面は“強い”“怖い”という父親らしさの減少・喪失によるもので、「穏和となった父親」「さらに頑固となった父親」という加齢の様相の違いから父親への「関わりやすさ」「関わりにくさ」となって肯定的・否定的の2つの傾向を示した。母親固有の老いの側面は、“気丈”“支え与えてくれる存在”という母親らしさの減少・喪失からとらえた老いで、「愚痴」や「イラつき」の表出・「配慮・協調性の喪失」などが挙げられ、今までとは異なる母親への戸惑い・対応の難しさを感じ、「関わりにくさ」となって否定的にとらえていた。

子が母親の老いを否定的にとらえた背景に、1つは日常生活全般を担う母親役割は父親の定年退職などの明確な役割からの離脱がなく老いによって突然もたらされ、家庭生活継続のため子は速やかな対応を求められること。2つ目は成人期以降も子には“支え与えてくれる母親”という無意識な期待が内在されており、母親もその期待に応えてきた親密な相互関係ゆえに、老いに伴う変容に対応できず否定的なとらえとなっていることが考えられた。これらのことから母親と子には適切な心理的距離による関係の再構築が必要であり、そのためには親密で焦点化しやすい母と子の関わりの“流れ”を変える他者介入の必要性が考えられた。